



# 江戸の危機を救った下町の英雄

## “鬼平” 長谷川平蔵宣以の生涯 (上)

佐々木 明 (元朝日新聞記者、獨協医大講師)

江戸の後期に放火犯や殺人、強盗犯を専門に取り締まった火付盗賊改方。その長官として大活躍した長谷川平蔵は池波正太郎の小説『鬼平犯科帳』やテレビ、映画で一躍有名になった。だが、実像は意外に知られていない。赤坂で産湯をつかり、青年時代に本所に転居して以来、死ぬまで下町に根ざし数々の巨悪を召し捕っている。一方、世界にさがけ刑務所の前身となる授産施設を創設するなど、その名は海外にも知られている。役宅跡の墨田区菊川三丁目には二つも説明板や記念碑があり、見学者が絶えない。今年に没後215年。教科書にも登場させたい墨田ゆかりの傑物なのである。



区が建てた説明板 (地下鉄菊川駅)

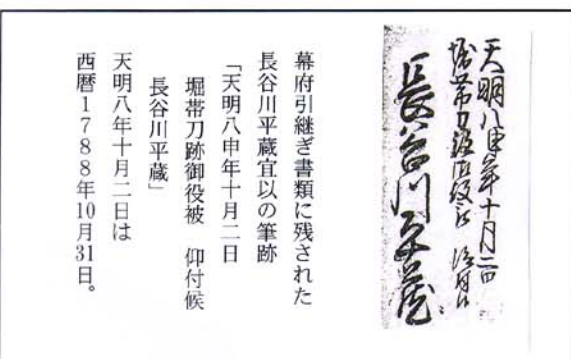
小説の主人公、「鬼平」の名は、長谷川平蔵宣以。平蔵は親子四代(父、本人、息子、孫)で名乗った襲名で二代目の平蔵に当る。幼名は鉄三郎。江戸時代に「鬼平」と呼ばれた文献は



役宅跡で開業している歯科医が建てた記念碑

ない。鬼平は池波氏の造語なので、本欄では本名の宣以を使う。千葉県に知行地を持つ四百石の旗本の長男。旗本は家禄が二百石以上一万石以下で時の将軍の拝謁を受けた者を言う。宣以は分家の八代目として赤坂で産まれた。家には旗本家から嫁いできた「正妻」と知行地から住み込みでいた「家女」という二人の母親がおり、家女との間に出来た妾腹だった。出生の秘密は成長するにつれ仲間から馬鹿にされた。旗本同士の屋敷替えで本所三丁目(現墨田区菊川三丁目)に転居した十代後半から墮落する。父、宣雄の目を盗んでは吉原につぐ遊興街で、自宅から近い門前仲町にくりだしては、飲み、打つ、買うを実行した。同期生が次々と拝謁(將軍の前で忠誠を誓う

儀式)を済ませているのに、不良をたばねては、悪の世界にのめり込む。皮肉にも、この墮落生活がのちの犯罪捜査で絶大な力を発揮するのである。悪人たちの話し言葉から、遊び方、行動範囲、貧民の生活ぶりまで、知り尽くした。不良仲間から「本所の鉄」と恐れられ、悪名をとどろかせもした。拝謁は23歳と遅かった。十代將軍、家治の時だ。息子を尻目に父の宣雄は出世街道を駆けあがり、火盜改長官になった。事件現場を重視する地道な捜査で目黒行人坂大火の犯人を召し捕るなどの功績で京都町奉行に抜擢された。しかし、一年あまりで激務のため殉職。傷心の宣以は再び本所三丁目に戻ると、妻子がいるのも忘れ再度の放蕩に明け暮れる。尊敬していた父の急死や遅い出世に我を失った。しかし、28歳で遺跡を継ぎ、西丸御書院番士になると心を入れ替え、剣と学問に打ちこんだ。仕える將軍は十一代家齊。老中は松平定信だった。41歳で將軍筆頭の家来である御先手弓頭に。42歳で父親同様火盜改長官になった。親子二代も異例。しかも、火盜改として歴代二百人を超す長官のなかで最長の八年間も勤めた例もない。江戸最強の火盜改と言っても過



幕府引継ぎ書類に残された長谷川平蔵宣以の筆跡  
「天明八年十月二日  
堀帯刀跡御役被 仰付候  
長谷川平蔵」  
天明八年十月二日は  
西暦1788年10月31日。

言ではあるまい。江戸の裁判記録、御仕置例類集によると、宣以が在任中に手掛けた主な事件だけでも76件ある。特筆されるのは、幕府役人の御用道中を装い、関八州を荒らし回っていた武装強盗集団の首領・神道徳次郎(神稻小僧)や徳川家の紋章を悪用し、豪商を襲った強盗集団の首領・大松五郎(葵小僧)らを召し捕っていることだ。浪人崩れの犯人たちは、二、三十人で金蔵のある商家などを踏み込むと強盗、殺人、強姦、放火を短時間で行った。武士までが怖くて外出を控えるなど、江戸市民を震えあがらせていた。二人の首領とも獄門晒し首にされている。

(下)に続く